

Radio On The Street
西谷文和

路上のラジオ ファンクラブニュース

2021.11.20 第9号

発行責任者：西谷文和

連絡先：〒564-0041 大阪府吹田市泉町1-22-33

TEL 06-6170-4757

メール otayori@radiostreet.net

このニュースは募金いただいた方、講演会に参加された方に郵送しています。今後も年に4回程度発行します。

ラジオの聞き方

スマホやパソコンで「路上のラジオ」と検索してください。YOU TUBE で聞けます。チャンネル登録していただきますと、毎回お知らせが来るので便利です。

21年総選挙と19年参議院選挙での比例票 (単位：万票)

	自民党	公明党	維新	立憲民主党	国民民主党	日本共産党	れいわ新撰組	社民党
2019年参議院	1771	653	490	791	348	448	228	104
	合計：2914			合計：1919				
2021年衆議院	1991	711	804	1149	259	417	221	102
	合計：3506			合計：2148				

「立憲共産党」と揶揄しているが

総選挙の結果は残念なものとなった。メディアは

政府系の御用評論家たちを登場させて、「立憲民主党が共産党と手を組んだから負けたのだ」。連合幹部は「今後は共産党と組まないで」などと騒ぎ立てている。本当にそうなのか？
実は立憲民主党の比例票は19年参議院選挙の791万票から今回の1149万票へと大幅に得票数を増やしているのである。(図)で

野党共闘は失敗したのではない 「不十分で遅すぎた」のだ

競り負けた選挙区が31

はなぜ議席減になったのか？

それは①約1万票以内で競り負けた選挙区が31もあった。②枝野幸男代表が、共闘を求める市民の声と、共闘を壊そうとする「連合」の間で「股裂状態」になり4党合意が遅れて準備不足のまま突入した。③自民党の総裁選挙はバンバン報道していた大手メディアが肝心の総選挙になった途端に報道量を激減させ、国民の関心が高まらず投票率が上がらなかった。この3点に尽きる。つまり「共産党と手を組んだから得票が減った」というのは大きなウソで、逆に「組まなかったらもっと減っていた」のである。ではなぜ御用評論家や「連合」はこうしたウソを声高に叫ぶのか？
それは、「野党共闘が強化されるのが怖いから」である。今までのアベスガ政治は1%の大企業や超富裕層のための政治であった。そしてマスコミは1%の代弁者。もし立憲、共産、れいわ、社民が伸びて政権交代が実現すれば、99%の、国民のための政治に切り替わる。国民は生活

の向上を実感し、生きる希望やさらなる社会連帯も芽生えてくる。そうなればもう国民は自民党政治に戻ろうとはしない。

「どっちもどっち論」に騙されるな

権力者は「本物で強力な野党共闘」が怖いので、「自民も野党もどっちもどっち」論を撒き散らす。そしてその間隙を縫って出てきたのが維新。自民党より右寄りで格差拡大、弱者切り捨ての維新がなぜ躍進したのか？それは11月19日に公開される「路上のラジオ」で詳しく解説しているの、ぜひお聞き願いたい。

次こそ政権交代を

総選挙の結果に意気消沈してはダメだ。来年夏には参議院選挙が控えていて、ここで今回のような結果になると改憲勢力が両院で3分の2を超えてしまい、憲法が変えられてしまう。「路上のラジオ」では引き続き、平和や格差貧困の解消、原発ゼロなどを求める市民の声を紹介しながら、「次こそ政権交代」の展望を示していきたい。

小出先生に聞く その4

廃炉は無理。石棺で封じ込め、浮いた予算を被災者へ

マルチダウンを隠していた

まともに報道したのはラジオのみ

——「原発事故は終わっていない」

(毎日新聞出版)で、「東京電力はマルチダウンを2ヶ月に渡って隠蔽していた」と指摘されています。これは本当ですか？

小出 本当です。私は事故直後にマルチダウンしたということはすぐに分かりましたし、発信を始めました。しかし東京電力や政府系の学者たちは「いや、まだマルチダウンしていない」と言い続けていました。

——メディアは逆の意見も取材すべきだった。福島事故直後、小出先生はテレビに出演されましたか？

小出 私はずっと原子力に反対して抵抗してきたわけですが、何があっても私にはマスコミからは声がかからない。そういう歴史でした。事故直後も出演依頼はありませんでした。

——事故直後でさえも？

小出 はい。NHKを含めてマスコミほとんど全て。いわゆる原子力ムラですね「原子力は安全だ」と言い続けていた学者だけが、事故の後もマスコミに登場していました。

——そんな中でわざわざMBS毎日放送ラジオの「たねまきジャーナル」だけが。

小出 スタッフが私に声をかけてくれました。3月14日からほぼ連日出演させてもらって、毎日刻々と変わっていく事故の情報を見ながら、私にわかることを発信しました。しかし東電から出てくる情報しか私は知ることができません。3月12日に1号機の原子炉建屋が爆発して吹き飛びました。東電が言おうが言うまいが、ちゃんとテレビに映ってしまう。そんなことを見ながら、独自に判断をしてラジオを通して発信する、これをやりました。

——当時の東電は「爆発的事象」(笑)と。事故から10年経った今、小出先生の意見を聞きにくるテレビや新聞、ラジオはありますか？

小出 まあ、ないですね。「路上のラジオ」以外では海外のメディアが来たりしますが、日本のマスコミが私のところに来ることは、まずありません。

——アベスガ政権になって9年、事

故当時と今では、その付度がさらに強くなったように感じるのですが。

小出 そう思いますが、事故当時から圧倒的に付度が強かった。大阪のローカル番組である「たねまきジャーナル」そのものが、1年ほどという番組ごとつぶされてしまうということに。いわゆる公共の電波で言えば「政府に反対する番組は一切がつぶされてしまった」ということです。アベスガ政治で、圧力はますます強まっている、と言われれば多分そうだと思います。

ロードマップを中止せよ

——例えば福島の廃炉。「私たちが生きていく間は、絶対無理」なんですよ？

小出 国や東電の言うロードマップに従った廃炉は、絶対無理です。

——今後いくら税金を突っ込むのだ？という話。デブリは取り出せないですよ。

小出 取り出せないです。国と東電がロードマップ、終息させるための工程表を書いた。溶け落ちた炉心は「つかみ出す」と。そして安全な容器に封入して、福島県外に運び出す

ます、と書いてある。

——どうやってつかみ出すんですか？

小出 「30年〜40年かけて溶け落ちた炉心をつかみ出して県外に持ち出す」という約束を福島県にしたわけです。絶対できません。

——このウソがまかり通っているわけでしょう？

小出 今でも。しかしウソをついたときの官僚はもういない。3〜4年で異動してしまうわけで、「自分がいる間に、とにかくやり過せればいい」という風にしか彼らは考えない。だからロードマップの30年〜40年を絶対に取り下げない。出来ない作業のために莫大なお金をつぎ込んで、また原子力産業は大儲けをしている、というわけです。

——「ごんな無理」と、メディアが報道すべきでは？

小出 ちゃんと行わなければいけない。原子力学会という原子力ムラの中心組織すらが、「そんなもの到底出来ない」(苦笑)という報告書を出しています。私が言ってるんじゃない(笑)、原子力学会という推進団体すらが言っているわけです。

——チェルノブイリみたいに、石棺で覆ってしまう方法しかないのでは？

旧ソ連の方が賢かった

小出 チェルノブイリの事故の際、

旧ソ連は「とにかく閉じ込めろ」と、60万人とも80万人とも言われる労働者、軍人、退役軍人などを動員して、莫大な被曝をさせながら石棺という封じ込め装置を作ったのです。この石棺は30年経ってポロポロになり、16年11月にこの石棺全体を覆うような「第2石棺」と呼んでいる構造物を。「第2石棺」の寿命は100年。つまり第1で30年、第2で100年。合計130年。事故が起きて130年間はとにかく手をつけることが出来ない。ひよつとすると、第3石棺でさらに時間を稼ぐかもしれない。

税金の浪費で肥え太る

——日本も早く切り替えたほうがいい？

小出 もちろん。無理な廃炉作業に数十兆円という莫大な予算を投入するのではなく、お金の有効な使い方と言えば、今はとにかく作業をしない。封じ込めるのが唯一の方法。でも原子力マフィアからみるとだからだと作業を進めるのは、むしろ「いいこと」なんです。

膨大な利権になっている。

小出 「できる、やるんだ」と言っても、いくらでもお金を引っ張れる。

——**辺野古基地の「埋めても埋めても沈む工事」と似てますね。**

小出 ゼネコンが儲かることをやるのです。(次号に続く)

馬毛島ルポその3

(前号まで)

基地反対派漁師さんたちの案内で馬毛島に上陸することができたが、そこには「タストン社」の見張りがいて、島の内部には入れなかつた。辺野古新基地建設でもそうだが、賛成派はなるべく現場を見せずに、粛々と計画を進めていこうとする。種子島に戻って島民の意見を聞いてみた。

2020年2月5日、鹿児島県西之表市の繁華街をブラブラ歩く。私のような「アベスガ大嫌い反体制ジャーナリスト」が現場を取材すると、どうしても基地反対派ばかりの動向を追いかけてしまい、賛成派の意見を聞かないままルポを書いてしまう場合が多い。やはりここは賛成派の「苦渋の決断」についても取材するべきだろう。

まずは4年前の市長選挙で次点に終わり、今回は途中で立候補を断念した浜上こう十さんのご自宅へ。

——**浜上さんが基地賛成で選挙に立候補された理由は？**

浜上 「そりやもう、基地交付金ですよ。読売新聞の報道によると年間25億円、10年で250億円ですよ。西之表市の年間予算は130億円くらいです。だから25億もあれば、国保料や水道料金などを値下げできるし、道路整備なんかにも」

——**過疎が進んで、商店街も閑古鳥ですからもね。**

浜上 「交付金に加えて自衛隊の宿舎ができるでしょ。そうなれば200世帯が種子島にやってくる。隊員に妻と子供が1人いたとすれば200×3で600人の人口増。これは誘致しないといけないでしょ」

——**4年前の市長選挙は次点、今回は満を持しての立候補でしたが、途中で降りたのはなぜですか？**

浜上 「上の方から言われたから。私は自民党員で、42年間警視庁に勤務していました。人事異動の命令を蹴つたら、組織に残れない。苦渋の決断でした」

——**今後、基地問題はどうなっていくと思われませんか？**

浜上 「粛々と進むでしょう。八板市長は『別の形で馬毛島を使おう』と

言いますが絵に描いた餅。島の99%が国の土地になっていて、FCLP以外に使えませんよ。山口県岩国市の市長に変わって、交付金が復活して130億円。キレイなサッカー場なんかが出来てみんな喜んでるそうですよ」

——**やはり交付金が出ると街が変わりますか？**

浜上 「救急車が中種子町から西之表市に入った途端、スピードを落とすそうです。道が悪くなるから。西之表市は貧乏なので道路を整備してない」。

——**昨日、国道58号線を走ってきましたが、そんなことなかつたような…。**

浜上 「国道ではなく市道は凸凹なんですよ。道路だけじゃない。例えば今、ボーリング調査してますが、その警戒船は1回出せば6万5千円。6時間で4交代。月に10回も船を出せば65万円ですよ。漁師も潤っています」

——**反対派が海上に出て抗議するから、そのための警戒船ですね。10回出て月65万円は大きい。漁に出なくても大丈夫ですね。**

浜上 「今年はキビナゴが採れないんです。だからキビナゴを追ってくる大きな魚もダメ。だからこのお金は貴重ですよ」

編集長のひとり言

西谷氏が、アフガニスタン在住の取材協力者から取り寄せたカブールの惨状を伝える写真を巡り、SNS上で批判に晒されたという。それによりメディア側が掲載を取り消すなどのドタバタがあったようだ。事実として行き違いがあったことも否めないにせよ、また対立する場合であってもひとりの責任ある発言であるならば等しく尊ばれるものであることは言うまでもないことだが、この類の話を書く度に、もやもやとした思いは残る。

報道に携わる者の今一番大切な役割のひとつは、言わずもがな戦火や寒さ、飢えに晒され、恐怖政治に怯えながら過酷な日々を生きる紛争地の人々の現状を世界に発信し、国際世論を動かす中で少しでも悲しい現実を終息に向かわせることである。小さなディバイスの中を覗き込み、時に指先ひとつで世界を知ったかのよくな気になってしまう私たちの日常の

中ではなかなか伝わりにくいことであるが、一方で混乱の中で取材をする現地協力者はじめ西谷氏のように命を張ったフリージャーナリストたちが、どれほどのリスクを背負って活動も続けているのかを慮ることができれば、早計にそのような流れには至らないはずとも思ってしまう。

もちろん感情論でまとめようとするのではない。発信力のあるメディア人として守るべき倫理は、一般人のそれよりも相当に重い。誤りがあったときの責任もまた重いと云える。ただ、混乱の中では、細心の注意を払っていても往々にして判断ミスをまねくこともある。大切なことは、間違いがあれば真摯に受け止め訂正することである。決して間違っただけなら、時には謝罪し、真実を伝え直すことである。決して間違っただけなら、大事なタイミングを逸したり、取材者の行動範囲は委縮するばかり

編集後記

なぜ維新が躍進したのか、なぜ野党連合が負けたのか。関西学院大学の富田宏治教授との対談で、冷静に分析しました。その他古賀明さん、佐高信さん、上西充子さん、上昌広さん、藤原辰史さん、内山健人さんとの対談をまとめました。「自公の罪と維新の毒。次こそ政権交代。7つの解毒剤」が11月末にも上梓されます。維新の毒が全国に広がらないように、ぜひご一読を。

(ディレクター・山本素)

——全国のみなさんに訴えたいことは？
浜上「馬毛島にFCLPの訓練基地ができたら、航空ショーが見れますよ。この部屋の窓から馬毛島が見えるでしょ。隣は民宿なんです。ぜひショーを見にきてください。騒音？ そんなのすぐに慣れますよ。戦闘機は種子島上空を飛ばないので安心です。上空を飛んだら？それはパイロットの腕が悪いだけです(笑)」
(次号に続く)



21年11月9日、日本からの支援金で緊急の食料支援

私はアフガンに合計11回入国して4人の通訳と知り合ったのだが、そのうち2人は国外に亡命、1人が行方不明、残った1人がカブール在住のアブドラである。昨年10月にはアブドラにスマホを手渡し、「何かあれば撮影し、送ってくれ」と頼んでいた。8月にカブールがタリバンに陥落して、彼はパニックになったカブールの写真を送ってきた。これを紹介した朝日新聞の記事に対して、「西谷が写真をネットから盗み取った」と騒動になり、朝日の記事は取り消された。アブドラと友人が撮影した写真はすぐにネットに出回り、その後私の記事が出るので、「ネットが先で私の記事が後」のように見えてしまう。それでSNSが一時炎上したのだが、私はアブドラを信じるし、真相を確かめるにはまた入国して取材するしかない。炎上が収まっても、アブドラは写真を送り続けてくる。これは食糧支援の様子。このままでは多くの人々が冬を越せずに餓死、凍死してしまう。いろんな意味でカブールに行かねば、と思う。

ではないか。

「路上のラジオ」の収録時に西谷氏に聞いてみた。「実名を晒して仕事している中で、よくそんな批判に耐えていますよね」と。西谷氏は「応援してくれる方もたくさんおられるので」と、いつもの穏やかな笑顔で答えるばかり。大丈夫ではないだろうが、さすがに肝が据わっていると感じた。私たちは、もしかしたら誰もが寛容になれる社会(それをも求めて活動しているのかもしれない)を感じた。

さて、「路上のラジオ」は、日本の政治が大きく動きはじめたこの9月〜10月においては、毎週に近い形で番組を送り出してきた。たいへんな日々であっただけに、それにどんな意味があったのかを考えるが、その間、皆様からたくさん応援メッセージやご寄附を頂戴したことがその答えではないかと感じている。そして何よりもそういった皆様は、多くの批判者とは異なり、ほとんどが実名で向き合ってくださいている。

リスナーの皆様、いつもあたたかい心を届けてくださり、本当にありがとうございます。これからも「路上のラジオ」をどうぞよろしくお願いたします。